

## 上田萬年との翻訳論争（1895年）に見る カール・フローレンツの西洋中心主義<sup>1</sup>

辻 朋季

### 1. はじめに、「日本学の父」フローレンツの日本「蔑視」？

ドイツ人日本学者カール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865-1939）は、1889年から1914年までの25年間、主に東京帝国大学独文科で教鞭をとる傍ら、専門である日本研究に従事し、日本書紀や万葉集、日本古代史などの研究において数多くの業績を残した人物である。そして1914年に、ドイツ語圏初の日本学正教授としてハンブルク植民地研究所に招聘され、ここで1935年の退職までの間に、文献学的な日本研究の基礎を打ち立てた<sup>2</sup>。そのため彼はドイツの日本学において「ドイツ人初の近代的日本学者」<sup>3</sup>と位置付けられているのみならず、日独交流史上でも「ドイツにおける日本学の父」あるいは「日本における独文学の父」などと称され、その功績は日独双方において今なお高く評価されている<sup>4</sup>。

しかし、日本研究を専門とし、日本の日本研究の近代化にも貢献したとされるフローレンツがいかにドイツ語母語話者だったとはいえ—25年もの間日本でドイツ文学を講じることが可能だったという事実は、彼が理論や方法論において優位な立場にあったことを示唆している。つまり彼の功績は、主にドイツから日本への文化移植を中心としたドイツ優位の日独関係を背景に、自らの拠って立つ西洋文献学の方法論を日本研究に適用したことでもたらされたものである。だとすればフローレンツが、ドイツ文化の優位性や特権性を当然の前提として、西洋中心主義的な姿勢のもとで日本研究に臨んでいたという可能性は十分に考えられるだろう。これを裏付けるように彼は実際、ドイツに帰国した直後に行った講演（1914年10月）において、第一次世界大戦でドイツに敵対し宣戦布告した日本への怒りを顕にして、次のように述べている。

我々ドイツ人は、この東アジアの国民と友好的に接しようという偽りのない気持ちの中で、日本人による誤解と猜疑心と嫌悪がかくも根深いものであることにあっけにとられて言葉も出ません。ましてや我々が日本人から感謝されているなどと言いたくもありません。そんなものはもう姿かたちもなくなってしまったのですから。しかし私は、ドイツの言語や文学や文化を広めようと働いて25年間もの間奉仕してきたこの国に対する憤怒の情で煮えくりかえっているこの瞬間でも、またほとんど無駄になってしまった自らの生涯の仕事について心の底から振

り返る時にも、私は今なお、自分が正しきドイツ人、つまり公明正大なドイツ人として、自らの信念、即ち日本人はもう少し人間的な性質を持っているという信念が全く失われてしまっていないのだと証明したいのです。<sup>5</sup>

フローレンツの日本観を、ナショナリズムの高揚した戦時中のこの講演からのみ判断することはできないものの、この点を勘案しても、自らの25年間の日本での活動を回顧したこの発言において、従来語られてこなかった彼の日本観の別の側面を垣間見ることが可能であろう。優れたドイツの文学と文化を後進国日本に教えてやったのだという驕りや、自分は日本人から感謝されてしかるべきだという自負、「公明正大なドイツ人」という高みから日本を見下す彼の視線には、憐れみすら込められているようにも見える。

もちろん先行研究でも指摘されているように、フローレンツの基本的な研究スタンスは、日本文学を西洋文学に匹敵するものとして位置付けようというものであり、代表的著作である『日本文学史』においても、日本文学のジャンルの多様さや歴史の長さを、西洋文学に比肩するものと捉えて評価している<sup>6</sup>。とはいえここでの日本文学の地位も、西洋文学を頂点に据える彼の価値基準のもとでの「同等」にすぎず、西洋文化を至上のものに見做す姿勢からフローレンツが自由であったとは言い切れない。むしろ上記の発言や、西洋中心主義が問われることなく当然のものとしていた当時の状況を勘案すれば、フローレンツの意識下にもやはり一常にあからさまな形で顕在化してはいなかったにせよ——一定の自己優越感が備わっていたと解釈できるのではないだろうか。つまり上記の発言には、彼の優越感の裏返しとしての「自らの研究対象である日本へのみくびりの視線」（本論文ではこれを「蔑視」と表現することとする）が、日本の対独参戦という特異な状況下で先鋭化した形で表れているものと解釈できよう。このような視点に立つ時、フローレンツによる日本文化への賞賛や肯定的評価を含んだ言説もまた批判的分析の対象となるだろう。では彼の他の研究業績や発言にも、同様の「蔑視」の視線が反映されていないだろうか。

本論文では、上記の問題提起に基づいて、フローレンツの日本研究姿勢を批判的に検証することを主眼としている。特にここでは、彼の日本研究業績の大半が翻訳業績で占められている点を考慮して、彼の翻訳をめぐるある論争を具体例として、そこでの議論を分析しながら、フローレンツにおける翻訳のあり方をめぐる問題点について考えていきたい。

## 2. 「文化の翻訳」をめぐる窮状

フローレンツは、アストン (William George Aston, 1841-1911) やチェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) などと並ぶ西洋人日本研究者の先駆的存在として有名だが、彼らの業績の大半は日本文学の翻訳から成り立っている。初期の日本学における主要な課題とは、日本語の原典資料にアクセスし、これを読み込んで解釈し、その内容を、翻訳を通して西洋に発信することにあつたと言える<sup>7</sup>。事実フローレンツによる日本学の分野での最初の出版物もまた翻訳業績であつた<sup>8</sup>。彼は万葉集と古今和歌集をはじめ、催馬楽や俳句、さらに明治期の現代詩など、日本の様々な時代から多様なジャンルの詩を選出して独訳し、これを1894年に *DichtergrüÙe aus dem Osten: Japanische Dichtungen* (『東方からの詩人の挨拶—日本の詩歌』、以下『詩人の挨拶』と略<sup>9</sup>) という書名で出版した<sup>10</sup>。だが同書における日本詩歌の独訳のあり方をめぐっては、翌1895年に大きな論争が巻き起こっている。事の発端は東京帝国大学博言語科の講師、上田萬年 (1867-1937) が、創刊後間もない『帝國文學』誌上においてその翻訳のあり方を批判したことにある。これにフローレンツが反論したため、両者の間で計5回に及ぶ議論の応酬が繰り広げられたのである<sup>11</sup>。

この論争における双方の議論を手掛かりにすれば、日本文学の翻訳に臨むフローレンツのスタンスを解明することができるだろう。しかも西洋における初期の日本研究の重点が何よりも翻訳に置かれていた点を踏まえれば、彼の翻訳姿勢を検証することにより、彼の日本研究姿勢全般についても見通しを得ることができるものと思われる。そしてその際には、翻訳と権力との関係を批判的に考察してきたポストコロニアル研究の成果が有力な理論的支柱を提供してくれるだろう。特に近代の西洋が、自らの言語を規範的な言語と見做してその優位性を自認し、その普遍性を標榜して非西洋の言語に西洋語との構造的同一化を迫ってきたという点は、特に西洋語と非西洋語との翻訳について考察する際に考慮すべき、重要な前提となる。この点を踏まえて、フローレンツによる日本語からドイツ語への翻訳プロセスや、上田との論争における議論にも、当時のドイツ語優位の力関係が影響を及ぼしていたと見ることはできないだろうか。

しかしながら、このような問題意識のもとで言語間の翻訳を批判的に検証し、その問題点を浮き彫りにするといった作業は、「言語の翻訳」から「文化の翻訳」(Übersetzung der Kulturen / kulturelle Übersetzung) へとテーマがシフトした今日の文化研究のもとでは、なおざりにされているのが現状である。「文化の翻訳」という用語は、とりわけムンバイ出身のポストコロニアル研究者ホミ・バーバ (Homi Bhabha, 1949-) のもとで多用され、今では文化研究全般における主要な分析概念として定着してきている。バーバは、エドワード・サイード (Edward Said, 1935-2003)

の『オリエンタリズム』*Orientalism*を継承しつつも、そのやや一面的な議論、即ち「心理的な単純化」という側面を批判<sup>12</sup>する形で西洋による他者表象の問題点への考察を深め、植民地主義をめぐる二項対立的な図式を解体して植民地をめぐる関係を動的に捉えることの重要性を指摘してきた。自らの議論の出発点をフランツ・ファノン(Franz Fanon, 1925-1961)に求め、非西洋を西洋に対峙させるアイデンティティ形成や伝統の捏造に警鐘を鳴らしたバーバが行き着いたポストコロニアル批評とは、彼自身の言葉を借りて言えば「出来事と発話の非連続と距離化、記号と象徴の中間にある時間のずれ」の中で闘うこと、「歴史の別の場、発話の別の形式」の確立を通じた近代への異議申し立てであった<sup>13</sup>。

バーバにとって「文化の翻訳」とは、文化接触における多元的で複層的な交流関係を翻訳とのアナロジーで捉えることである。重要なのは、西洋人植民者による植民地住民への一方的な支配と同化のプロセスとして植民地主義を捉えるのではなく、互いの働きかけ(interaction)や二項対立に収まらない諸文化の相互変容、さらには権力関係や価値基準の逆転や置き換えのプロセスに目を向け、植民地を取り巻く文化状況をよりダイナミックに捉えることであるという<sup>14</sup>。このような視点から二項対立の克服を試み、植民地主義研究に新たな次元を開拓したことで、バーバは今日、サイド、スピバックと並ぶポストコロニアル批評「御三家」<sup>15</sup>と称されている。

しかしその一方で、彼の議論がポストコロニアルな対立軸そのものを解消してしまうとの批判も根強い<sup>16</sup>。実際に彼は、「重なり合い」や「ハイブリッド」を求めるあまり、(植民地主義的な意味合いを持つものを含む)西洋的な語彙を解体する形で、「翻訳」の意味内容まで書き換えてしまい、批判的考察の萌芽を摘んでしまっているように見える<sup>17</sup>。二項対立を超えた「第三の場所」や「中間的空間」を提唱する彼は、常に既存の(西洋的な)用語の一義的な意味内容に揺さぶりをかけ、その意味をずらし、攪乱することで西洋近代概念の脱西洋化、脱中心化を試みる。だが、遂行的で変形をもたらす構造を持つポストコロニアル的「翻訳」の力に言及し、また意味の境界線を不断に引き直すために「意味の多義性」を重視するバーバは、皮肉にも既存の「翻訳」の意味までも書き換え、「書き直し」や「再解釈」、「読み換え」などの同義語へと置換してしまったように見える。テキストではなく記号の言説分析へとシフトした彼の「翻訳論」は、個別具体的な言語間の軋轢や闘争というテーマからは完全に遠ざかってしまっている。

そもそもポストコロニアルリズムを踏まえた翻訳研究とは、何よりも言語間の不平等、特に西洋言語による普遍化、同一化という暴力のもたらす問題性を明らかにすることから始まったものである。にもかかわらず現状では、「言語の翻訳」という問題を抜きに「文化の翻訳」が語られるために、本来の主眼であった権力批判の文脈が解体され、翻訳概念自体までが「文化接触における相互変容」程度の意味へと色あせ、西洋

近代語を取り巻く翻訳の問題性が見えにくくなってしまっている。このことが皮肉にも、却って西洋中心主義の追認・強化につながるのであれば、「文化の翻訳」という議論自体が自己矛盾を抱え込んでいることになり、その枠組みを根本から見直す必要性が生じるだろう。

この「文化の翻訳」論のアポリアが、バーバの理論自体に内在するものか、あるいはバーバを俗流に解釈した研究者による「文化の翻訳」の濫用に由来するのかは、改めて紙面を割いて考察する必要があるだろう。だがいずれにせよ、文化事象の比較を安易に「翻訳」の名でテーマ化することに対しては慎重になる必要があることは確かである。と同時に、文化的翻訳を論じる際には、何よりも言語間の翻訳に横たわる権力関係への批判的考察や、翻訳行為それ自体の問題性から出発する必要があるのではないだろうか。

本論文ではこの点を踏まえて、フローレンツの翻訳業績をめぐる上田との論争具体例にして「言語の翻訳」の問題点を明らかにすることから出発して、フローレンツの翻訳行為に潜む西洋中心主義の検証へとつなげ、さらに賞賛と「蔑視」とが混在する屈折した彼の日本観を分析していきたい。まず論争の経緯を概観したうえで、この論争におけるフローレンツの日本文学や翻訳についての認識、特に彼がどの程度、自らの文化のもとで形成された価値観に重きを置いていたのか、また日本文学の価値をどう位置付けていたのかを明らかにする。その上で、『詩人の挨拶』における日本詩歌の翻訳方法を批判的に検証し、言語間の力関係がフローレンツの翻訳行為に与えた影響を読み解き、彼が生業とした翻訳を中心とする日本（文学）研究という行為の西洋中心主義的性格を明らかにしていきたい。

### 3. 上田—フローレンツ論争の経緯

『帝國文學』で繰り広げられたフローレンツと上田の議論の要点は次の通りである。

#### A. フローレンツの独訳和歌集に対する上田の書評<sup>18</sup>

『帝國文學』第一巻第二号に寄稿した寸評において上田はまず、フローレンツの訳業を讃えて『詩人の挨拶』出版を慶賀し、翻訳を通して日本の優れた短詩が西洋に紹介されることに歓迎の意を示した。そのうえで彼は、「予は徹頭徹尾先生の譯に賛同する者にあらず」として、フローレンツの翻訳の不備を指摘する。フローレンツの翻訳は、原作である短歌、発句、狂句などの形式を改変しているため、原詩の持つ妙味が損なわれており、「これではあまりに原作が可愛想」だというのである。そして「かかる短句の翻譯は、二行位にてなにとか工夫のつかざる者か、敢て東西の識者に問ひ

奉る」と問題提起した。その際上田は、『詩人の挨拶』所収の2作品を自ら日本語に反訳してフローレンツの独訳と対置し、これらがいかに原作と乖離しているかを示そうとした。原作、フローレンツの独訳、上田の反訳は以下の通りである。

落花枝にかへると見れば蝴蝶かな<sup>19</sup>

Augentäuschung.

Wie? Schwebt die Blüte, die eben fiel,  
Schon wieder zum Zweig am Baum zurtück?  
Das wäre fürwahr ein seltesam Ding!  
Ich näherte mich und schärfte den Blick —  
Da fand ich — es war nur ein Schmetterling.

見まちがひ

なにたった今散った花がもう一度木の枝に飛び歸ったとか。ほんとにさうならまこと不思議だ。なんだ近くへ行つて眼を鋭くしてみたら、ハハア、たった一疋の蝶々だった。

もる屋根を三年なほさぬ馬鹿孝子<sup>20</sup>

Der Misverstandene Konfucius.

Drei Jahre soll ein pflichtgetreuer Sohn  
Sagt Koshi, um den Vater Trauer tragen  
Und während dieser Frist nichts Neues wagen.  
Doch wollt' er nicht, so glaub' ich fest,  
Dass dieser Narr drei Jahre lang  
Sein Dach nicht reparieren lässt!

誤解された孔子

孝行な息子は、三年の間父の喪に服して、其間は何事も新しきことはせぬがよいと、孔子様はいはれたが、しかし孔子様だとて、このお馬鹿さんの様に、三年の永い月日を、屋根もなほさないでよいとは、のたまはなんだらうと、おれは慥に思ふ、

B. フローレンツの反論：「日本詩歌の精神と歐州詩歌の精神との比較考」<sup>21</sup>

フローレンツは上田の批評に対し、次号の『帝國文學』上で17ページにわたって

持論を展開し、自己の翻訳の立場の正当性を主張した。彼によれば、詩歌の翻訳は詩句の字義の移植作業ではなく、原詩の味わいを翻訳語の読者に伝えることであるという。

彼はまず、翻訳においては、日本人が原作から受けるのと同様の感動や印象をドイツ人に与えることが重要であり<sup>22</sup>、これを可能にする翻訳とはどのようなものか、ゲーテの『西東詩集』*West-östlicher Divan* における翻訳論から3つの翻訳形式に関する議論を引用して説明を試みた<sup>23</sup>。第一は、「質直なる散文体の翻譯」だが、ここでは「詩術の特色は悉く滅却、詩的情熱も散じて尋常一様の無味憺白に陥る」といい、第二の「譯家自ら身を異域の状態に置かんと」いう努力も、結局は「外國の意趣を領するに」とどまり、「之を出すに自家の意趣を以て」することで原作の特色が破壊され、訳者の特色に置き換わってしまうという。これに対し第三の方法、即ち訳文と原文の一致を目指す翻訳こそ「我等をして始めて能く其原作者に特有なる思想と感情とに親灸せしむるもの」だという。そこでは、訳者がどのような語句や詩形を使うかが重要なのではなく、原文の味わいを翻訳語の読者に伝えることが重要視される。反対に「同一の筆法を以て他國の言語に表はす時は、了解し難き謎語の如きものとなり、ゲーテの所謂「七箇の封印ある書」となるもの」<sup>24</sup>が多いとして、語句や詩形にこだわることに対して否定的な見解を示している。

フローレンツにとって訳文と原文の一致とは、形式上の一致ではなく、詩的妙味の一致である。彼は、翻訳に際し敢えて原文よりも多くの行数を割いた理由として、日本と欧州における詩的理想の差異を挙げた。日本人が最良の詩歌と見做す地口弄語のようなものは、欧州では高雅な文致に適さないというのである。欧州人も地口弄語を楽しむとはいえ、これを詩的であるとは捉えないため、短歌などの日本の叙情詩は、欧州人の趣味から言えば単なる詩的格言か詩句の片碎にすぎず、ほとんど詩の体を成していないという。この点をフローレンツは「短歌及び短句が殆んど日本詩界を壟斷せる日本文學の一大災厄」と端的に表現している。また、短編の詩よりも長編の詩に価値を置くというヨーロッパの価値基準も提示し、「善良なる長歌の翻譯百篇は短歌の翻譯萬篇よりも、日本文學の光榮を高むること遙かに大なるべし」と述べる。他方欧州には、厳密に言って日本のような短形の詩はなく、二行から成る審美的格言、風刺的批評、警句などは全て、教訓的な詩歌という狭隘な範囲にのみ用いられるにすぎず、多くの批評家はこれを真正の詩歌とは認めないという。「落花枝に」の句は真正の叙情詩と言えるものであるが、これを二行で独訳したのでは意味が伝わらずに支離滅裂になり、原作の妙味は伝わらないという。

「もる屋根を」の句についても、亡き父のために三年の喪に服すべしとの（日本人には自明とされる）儒教の教えについて説明しなければ句の背景がわからず、貧乏だから屋根を修繕しないのかといった誤解が生じるとフローレンツは主張し、儒教の故事についても訳中で明らかにする必要があると述べる。訳注を別に添えて解説するこ

とも可能だが、彼は「詩中思想の要領は、必ず其の語句以外の注解を待たずして自から明瞭ならしめざる可からず」としてこれを退け、代わりに訳詩自体を長くしたのだという。母語話者には自明でも訳詩の読者には馴染みのない思想や典故は、巧妙に原作中に点綴することが必要で、それは絵に例えれば原作である「本景」に「遠景」を加筆するものだという。

上記の点からフローレンツは、翻訳の要務とは語句・形式の如何ではなく、原作の思想感情及び詩的感動を正確に移植することだと強調した。また、字義通りの翻訳は往々にして原作の精神を損なうという点を、具体的に上田の直訳調の反訳の欠点を指摘することで例示しようと試みた。ein Schmetterling のein は不定冠詞で、日本語ではこれを省略できるため、「一疋の蝶々」という上田の反訳は不適切であり、また schärfte die Augen はsehen「見る」を、韻律を考慮して詩的に表現しだけで、「目を鋭くする」などと訳すべきではなく、このように「逐字譯に汲々」とした上田のもとでは「詩的情熱も散じて尋常一様の無味乾燥」に陥っているのだという。さらに彼は議論の最後に、ドイツの批評家が（フローレンツ訳の）この二首を称揚し、これをもって日本の詩人の持つ「優美の詩想と機警なる頓才」の証明としている、という現状も引き合いに出して、自らの翻訳を擁護した。

### C. 上田の反論：「フローレンツ先生の和歐詩歌比較考を読む」<sup>25</sup>

上田は、フローレンツが発句や狂句を真正の叙情詩と定義したことに対し、これらは「獨逸にはなき、日本には非常に發達せる、俳諧発句と申すものにて候なり」と反論した。また、フローレンツが作者についての知識、同年代の文学的思潮、さらに間テクストの知識に乏しい点も批判に挙げ、「表面のみより其句を解釈して、其解釈上に多少の面白味を見出したりとて、それを以て直に何々詩なりなど論断するに至りては、ゲーテは知らず […] 日本普通の人間は毫も賛成致さざる」あるいは「日本には幸い七箇の封印ある書などいふいかめしき憲法あらざるが故に […] かかる翻譯を処分致し難き事だけが遺憾」と述べた。また、短句を二行では決して訳せないというフローレンツの主張を疑問視する上田は、「獨逸とて詩人は多し、ゲーテ、シルレルにへたばりつかねば東洋の詩歌を譯すべからずという人のみには限らざるべし」と反論。「たった一疋の蝶々」についても、「たった」は「だった」にかかる副詞であり、また「一疋の蝶々」も（日本語母語話者には）表現上問題なしとしたうえで、「予は譯者が無分別に知ったかぶりに呑込主義を振廻せし所に、ゲーテが未だいはざる翻譯上の心得を涵養する必要を見る」と説き、「如何に獨逸人にてても、日本の詩歌だけには、今少し特別に教育を得て後、其翻譯に従事すべし」とフローレンツに要求した。また、『詩人の挨拶』がドイツの文壇で評価されているとの主張に対しては、「一犬虚を吠えて万犬これに従いし古例」を想起させるといい、「日本の詩歌には無学の輩 […] が

如何に稱揚するとも「…」予は決して名誉と思わずうれしとも感ぜざるなり。かかる事書きたてて得々たる先生の御心の程こそ怪訝の至り」と応酬した。

#### D. フローレンツの再反論：「上田文學士に答ふ」<sup>26</sup>

俳諧発句を日本特有のジャンルとした上田に対しフローレンツは、これらの短詩は叙事詩でも劇詩でもないのだから叙情詩としか定義しようがないと反論した。なお、ドイツにも発句狂句に類する短詩、「クラップホルンフェルゼ」Klapphornverse<sup>27</sup>があるものの、これは高尚な文学とは見做されないとし、日本の短詩が西欧で高尚な文学と認知されるには形式の変更やむをえないと改めて主張した。また上田の指摘する、原詩が含意する背景知識などは、脚注の形で加えることもできなくはないが、挿絵入りの装丁の詩集にはそぐわないことから割愛したのだという<sup>28</sup>。表題がübersetztではなくübertragenとなっているのも、直訳流の翻訳が主眼でないことの証であるという。また日本語母語話者には表現上問題ないと上田が反論した「たった一疋の蝶々だった」という反訳についても、ここでのeinは弱格である以上不定冠詞でしかありえない、と韻律論をもとに再度批判した。最後は、上田の態度について批判し、上田がフローレンツの独訳詞集に尊敬と賞賛を寄せるとしながら、ドイツの批評家の評価を「名誉と思わずうれしとも」思わないのは「天に向ひて唾はくも同然」であると結んでいる。

#### E. 上田の再反論：「再びフローレンツ先生に答ふ」<sup>29</sup>

上田はここで、フローレンツによる日本の詩歌の位置付けの変化を問題視し、「ナツールゲヌス（自然のたのしみ）部中に措かれし守武の諧謔的の句が、予の批判に対する上に一句の辨白もなく、今は弄語的ただしは頓智的詩歌とまでに相場を變じ来りしは頗る面白き次第ならずや」<sup>30</sup>と批判した。また自らの著作をübersetztではなくübertragenとしたフローレンツが「ゲーテを引きて翻訳に三種あり、封印に七箇ありなど」と論じた点を揶揄した。最後に上田は、フローレンツから批判された自らの態度のアンビバレンスを表面的ながらも認め、「天に向ひて唾はくも同然かな。さてもさても」と結んだ。上田は新たな問題提起や批判を控えたために、フローレンツはさらに上田に応酬することはなく、両者の議論は平行線をたどったまま、論争は終結した。

## 4. 上田—フローレンツ論争への評価をめぐって

上田—フローレンツ論争はこれまで、日本の比較文学論者の中で「最初の比較文学

論争」<sup>31</sup>と位置付けられ、日本の文学研究の近代化を促す契機としての論争の歴史的意義が強調されてきた。フローレンツ研究者の佐藤マサ子によれば、論争は「日本人に日本文学を西洋の文学研概念の枠内で捉えることの必要性を自覚させる重要な契機」<sup>32</sup>であり、「日本人に改めて日本文学とは何かという問い直す機会を提供し」<sup>33</sup>「日本の伝統詩そのものを客観化する契機にもなった」<sup>34</sup>というのである。佐藤はまた、この論争が当時の日本に与えたインパクトは大きさにも言及し、日本の多数の知識人がフローレンツの議論を受け入れたこと、そしてその結果「日本の伝統詩歌を西洋詩への翻訳を通して客観化することができ […] 日本詩歌の特質に対する認識」<sup>35</sup>を深めた点を指摘している。論争は日本国内の様々な反響のもとで「より広範な人々に、日本詩歌を西洋詩と単に概念的にではなく、具体例によって対比して考える新たな機会を与えた」<sup>36</sup>というのである。

この論争はまた、1985年にハンブルク大学で開催されたカール・フローレンツ・シンポジウムにおいて複数の研究者によって取り上げられたことで、ドイツの日本学分野でも注目されるようになった。特にハンブルクの日本学者ローラント・シュナイダーは、当時新たに提唱された受容美学の理論を援用して、フローレンツの翻訳が当時のドイツ人読者（＝内包された読者）に志向した翻訳であった点を指摘して彼の翻訳業績を評価している。『詩人の挨拶』の好調な売れ行きと、それに伴う頻繁な改版という事実は、フローレンツがドイツ人読者のニーズに応える翻訳を行ったことを示すものであり、その意味で彼の翻訳は成功であったのだという<sup>37</sup>。

このようにフローレンツの立場が肯定的に捉えられているのとは対照的に、彼の論敵であった上田萬年に対しては否定的な評価が大半を占めている。とりわけ上田が論争時に「俳諧発句」を日本特有の文学ジャンルと標榜した点は、彼の偏狭なナショナリズムの表れと解釈されてきた。佐藤マサ子は、上田が「日本の短歌は日本人にしかその妙味がわからぬものという結論を出すに至った」<sup>38</sup>と述べているし、論争を初めて取り上げて比較文学的視点から紹介した千葉宣一も「フローレンツの日本文学に対するエキゾチシズム的な問題関心が、ユニバーサルな普遍的要素に向けられていたのに対し、国学的ショウビニズムの学風を否定した上田萬年が […] 結果的には、日本文学の民族的特質を過大評価？せざるをえなかったのは、ヨーロッパ文化の植民地的状況から、一刻も早く独立宣言を發布する日の到来を祈念する、コロニヤル・コンプレックスに起因する反作用であった」<sup>39</sup>として、上田の民族主義的側面を指摘している。

上田はまた、そのナショナリスティックな言語観と、彼が深く関与した言語政策ゆえに、とりわけ近代国民国家論に依拠した昨今の社会言語学的研究において、たびたび批判的に取り上げられてきた。講演「國語のため」における、「國語は日本人の精神的血液なり」<sup>40</sup>といった発言に代表される言語観をもとに、上田が西洋の近代国民

国家に範を取って標準語を措定し、教育を通じてその洗練と普及を図った経緯は、小森陽一やイ・ヨンスク、安田敏朗らの研究が詳細に論じた通りである<sup>42</sup>。国語が内包する排他性や暴力性が、方言や植民地の言語を副次的地位に追いやるとともに、国語の普及が大衆動員を容易ならしめるのみならず国民国家の凝集力を強化する役割を果たした点を考慮すれば、上田の国語理念と彼が提唱した国語普及政策が数々の問題を孕んでいることは間違いない。そして彼の国語政策に潜む暴力という問題が、例えばポストコロニアルな視座のもと、「本土」と「沖縄」、「内地」と「植民地」といった関係性において国語を問い直すなかで浮かび上がってくることも確かである。またこの文脈に即して上田を西洋志向型の民族主義者という、明治期日本のいわゆる「進歩的知識人」の典型例として見れば、論争時における彼のジレンマ—対外的な日本の自己主張のために西洋による承認を求めつつも、フローレンツの翻訳は日本文学の独自性を損なうものだと反発するが、西洋の学問に依拠する以上、知識と理論において彼に太刀打ちできなかつた—を読み取ることもできよう。

しかし、このように論じたとしても、その成果はベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』に触発されて再三論じられてきた、日本の近代化が孕む矛盾や問題点を指摘する一事例の域を出ないし、既に指摘されてきた上田批判の文脈においても、傍証を加える以上の意味を持ち得ない。またいかにフローレンツの議論が日本に与えたインパクトが大きく、かつ彼の翻訳がドイツにおいて好評を博したと言っても、そのことから彼を論争の勝者として見たり、西洋近代を代弁する彼の立場を規範化したりすることには慎重でなければならない。というのも、フローレンツの議論の中身を十分吟味せずに彼の立場に正当性を与えたのでは、彼が拠って立つ西洋の理論や価値基準が特権化されるのみならず、論者自身が（意図しない形で、時には意図に反して）これを内面化し、西洋中心主義の再生産に加担してしまいかねないからである。

事実先行研究には、どちらの主張に分があったか、論争の勝ち負けを論じようとする傾向が強く、しかもその「判定」の多くはフローレンツに軍配を上げている。論争が西洋近代の文学理論を基礎に行われた以上、西洋人文主義の伝統を体現するフローレンツに上田は太刀打ちできなかつたと言うのである。この点は、千葉が両者の論点を説明する際に用いた表現の相違に象徴的に表れている。彼は、フローレンツの議論には「反論」「論駁」「断言」「指摘」「厳しく批判」「駁論」などの中立的な用語を用いる一方、上田の議論を「挑発的な問題提起」「挑発的な反論」「揶揄」「激しい論断」「極論」さらには「徒に嫌悪と焦燥に満ちた私的感情が露呈するのみ」と形容している<sup>42</sup>。あたかも理性的・学術的に議論を展開するフローレンツに上田が感情的に怒りをぶつけている、と言わんばかりである。

だがこの論争は、このような善悪二元論に回収できるほど単純なものではない。というのも、他ならぬ日本の比較文学研究者が指摘しているように、フローレンツが叙

情詩調に翻訳した「落花枝に」の発句は、その後の西洋では、原作の形式を損なわない形で、俳諧調に翻訳するのが主流となっていったからである。ポール・ルーイ・クーシュー (Paul-Louis Couchoud, 1879-1959) による仏訳 *Un pétale tombé/ Remonte à sa branche / Ah! c' est un papillon.*<sup>43</sup> やエズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) の英訳 *The fallen blossom flies back to its branch: A butterfly.*<sup>44</sup> などの例からは、原作同様の制約のもとで詩情を表現することが、俳諧の翻訳において重視されていった様子がわかる。そしてここから、アメリカにおける 1920 年代以降のイマジスト運動や、フランスにおけるハイカイ詩運動が盛り上がり、20 世紀西洋における詩作の行き詰まりに新しい境地を提供していったのである。つまり上田—フローレンツ論争後の西洋における俳諧受容は、フローレンツの議論とは正反対に、むしろ上田の要求に従う形で進行したばかりか、フローレンツが論拠とした「欧州の詩的理想」そのものが変化していったことがわかる。このことからまず、フローレンツが欧州の詩的理想を静的にしか捉えられず、翻訳を通して西洋文化の価値規範が変化する可能性を考慮していなかったことがわかる。と同時に、ゲーテやシラーに「へたばりつかなくとも」東洋の詩歌が訳せたという意味で、真理を言い当てているのは上田の議論の方だった、という解釈も可能となる。

## 5. 植民地主義と西洋的価値の「普遍性神話」

従来の比較文学的研究の多くは、日本文学（研究）の近代化の過程をポジティブに捉えるあまり、フローレンツを西洋近代の文献学的方法論を体現する人物と見做して彼の立場を規範化してしまい、論争を十分に相対化して論じられなかったように見える。そのため、フローレンツが論争を制していたという解釈に囚われがちになり、上田の議論のナショナリスティックな側面にばかり注意が向けられる一方で、フローレンツの議論に内在する問題が取り上げられず、客観的な判断がなされてこなかったようである。よってこの論争を捉え直すに当たっては、フローレンツの議論を支えている認識基盤や、彼によって代弁された西洋近代の思考様式や文化的諸価値そのものを批判的に捉えて、これらを相対化していくことが必要ではないだろうか。

ポストコロニアリズムの研究成果が示した通り、近代の西洋は、自らの諸制度や概念・文化的諸価値の優位性と普遍性を信奉するなかで、非ヨーロッパ世界を劣等視する形で差異化し、また「文明化の使命」などのスローガンに象徴されるような、植民地支配を正当化する言説を生産・流布してきた。確かにドイツは、領土支配という意味での植民地主義への加担の規模は英仏に比べれば小さい。しかし学術的議論のレベルで見れば、とりわけドイツにおいて尊重された人文主義 (Humanismus) が、

西洋の思考様式や価値観の普遍化・絶対化に一定の貢献を果たしてきたことも事実である。ドイツの代表的な文化研究者ドーリス・バッハマーン＝メディック（Doris Bachmann-Medick）は、今なおゲーテ由来の人文主義的伝統に囚われ続けているドイツの比較文学研究の問題点をこう指摘している。

この（人文主義の：引用者）伝統は、比較文学研究の射程を、文学的カノンを選ぶための価値の基準づくり—どの文学作品が傑作であるか—へと狭めてしまっている。世界文学と聖典づくりとがこのように手を組んだことで、文化の垣根を越えて普遍妥当性を持つとされる美的基準や、「一般的な人間」という人類学的な普遍性が措定されることになり、文化間の理解や翻訳の成功は、こうした普遍性を経なければありえないというふうと考えられてしまうのである。<sup>45</sup>

つまり、フランスやイギリスが物質的進歩の普遍性を標榜して対外進出を進めたように、ドイツの人文主義はドイツ（ないし西洋）文学をカノン化し、その価値を人類普遍の世界文学へと押し広げ、非西洋世界にまで文学的規範の一元化・同化を迫るとともに、西洋語の聖典を高尚な文学とし、非西洋のヴァナキュラーな口承文芸を低俗と見なす文学の序列化をもたらしてきた、というのである。

もちろん西洋文化の諸価値の中には、人権思想や民主主義の理念など、時代や地域を超えて共有され得る普遍的な要素が多数含まれていることも確かだし、これらが非西洋世界に対しポジティブな変革をもたらした面も否定できない。しかし、西洋近代の価値基準が常に唯一絶対で普遍的に通用するとは限らないし、また非西洋との文化接触によって変容し得るものでもある。にもかかわらず、植民地主義のもとで、西洋は往々にして、自らの文化的価値の絶対性・優位性を自認し、それを普遍的なものとして受け入れるよう非西洋世界に要求して、いわば暴力的に西洋との同化＝植民地化を促してきたことも事実である<sup>46</sup>。

西洋が自己正当化の論理として普遍性を標榜し、他者に対してもその受け入れを強要することは、非西洋世界に対する暴力という形で発現しかねない。この点を考慮するとき、上田－フローレンツ論争におけるフローレンツの議論にも、「普遍性神話」への依存が潜んではいないだろうか。ゲーテやシラーに範を取って論じ、短歌・短句の形式を「日本文学の一大災厄」と見る彼の立場や、長編の詩が短詩よりも価値を持つという基準をそのまま適用して短歌を主とする日本の詩作全般を過小評価した態度にも、植民地主義に通底する「普遍性神話」の持つ暴力性の一端が垣間見られるのではないだろうか。以下においては、この点を踏まえて、論争における両者の立場を再検証していきたい。

## 6. フローレンツに潜む西洋中心主義的発想

論争を読み解く際にまず注目に値するのは、発端となった上田の批評がそれほど論戦的な調子を帯びてはいなかった点である。確かに翻訳の実例を挙げて批判すべき点は指摘しているが、全体の分量も多くないし、評価すべき点は敬意をこめて高く評価しており、言葉遣いも比較的丁寧であった。これに対しフローレンツが、自ら日本語で<sup>47</sup>激しく反論したのはなぜなのだろうか。このことが既に、上田の批判がいかにかフローレンツの気に障ったかを物語っている。フローレンツは明らかに、翻訳を通して日本文学を西洋に広めることこそ日本人の望むところなのだから、自分は日本人に感謝されてしかるべきだと考えていた。この点は、上田の「(発句狂歌の：引用者)原作者があまりに可哀想」という批判に対するフローレンツの「宗武とかなにと云ふ名匠も恐らく夢にだに見しことなき、獨逸の讀者に知己を得たとなれば不平を云いては済まぬなるべし」<sup>48</sup>という反論に端的に表現されている。自分の翻訳のおかげでドイツに紹介してもらえるのだから、不満なはずはなかろうという、というフローレンツの驕った発言から察するに、彼にはそもそも日本側から反論がなされたこと自体が心外だったに違いない。

この長文の反論はまた、上田の批判が単にフローレンツの気に障ったというだけではなく、彼が紙面を割いてゲーテやシラーに全面的に依拠しながら自らの翻訳の正当化に汲々としなければならぬほど核心を突いていたことを暗示している。実際フローレンツは上田を「好敵手」と持ち上げ、(対等の立場に置いているかは大いに疑問ながら)論争に値する相手と見做しているが、そもそも反論に値するような日本側からの批評を彼が想定していなかったからこそ、心にもない形で上田を持ち上げながらも、実際には17ページにもわたって自己弁護を強いられていたのである。既にこの点に、彼の狼狽ぶりと上田の批判の鋭さを読み取ることが可能なのではなかろうか。

このように、上田の批判に対して過剰ともいえる反応を示すフローレンツは、ゲーテ、シラーを始めとする西洋の文学理論、翻訳論を援用して自己の立場の正当化を図っていく。即ち彼は、自らの議論はゲーテの翻訳論と全く同じであると主張し、単純な字義の移植はゲーテの言う「七箇の封印ある書」に陥ると論じ、シュレーゲルによるシェークスピアの翻訳を理想化し、またゲーテの著作と日本詩歌とは同列に扱うべきでないと戒めているのである。フローレンツによるゲーテの引用の的確さや妥当性については更なる検証が求められるものの、ひとまずこの点を除外しても、彼の議論の多くがゲーテに拠っており、これを自説の正当性の根拠としようとしていたことが伺える。

フローレンツはまた、ゲーテの『ファウスト』*Faust*が、「意味のわからない章句で満ちている」にもかかわらず至高の作品と称されている理由を根拠付けないまま、こ

れを理想化し、日本詩歌との比較を許そうとはしない。日本の短詩をそのまま独訳しては意味不明の内容になる、という持論に対し、『ファウスト』も意味不明の章句に満ちているのではないか、との反論を見越した彼は、『ファウスト』にはこうした「欠点を宥恕してあまりあるほどに洪大な功德」が他にあるのだと述べ、「あのような小抒情詩」（＝日本の短歌）にも同じことを言ってはならないと釘を刺している。だが至高の文学は天才の筆から生まれるとする、19世紀ドイツではごく一般的であった文学理論に依拠したフローレンツは、『ファウスト』が持つとされる「洪大な功德」が具体的に何を指すのか、またなぜそれが洪大な功德に満ちているのかといった点には言及していない。こうして彼は、上田に応酬するために西洋中心主義的に議論を展開した結果、自身が翻訳を手掛けた日本詩歌の価値を切り下げ続けてゆかざるを得なくなる。

フローレンツが、日本語の難解さにもかかわらず敢えて作品を選出し翻訳した以上、彼はもともと、原作に対し一定の文学的価値ないし美的価値を見出していたつもりであったに違いない。しかし他方で彼は、ゲーテ、シラーを頂点とする西洋的文学規範を相対化することができず、無意識のうちに、西洋中心的なヒエラルキーの下位に日本詩歌を位置付けていたし、日本文学の価値を西洋に伝えたいという「善意」の態度自体も、彼の自己優越感に由来するものであったと言える。つまりフローレンツの日本文学賞賛の態度は、（第一節で定義した意味での）日本「蔑視」の態度、即ち無意識の自己優越感と表裏一体の関係にあるという点が、上田への応酬の過程で明らかになっていったわけだが、フローレンツは自らの認識基盤に関わるこの構造的な問題に自己批判的に向き合おうとはせず、ますます西洋中心主義態度を明確にしていった。彼は、日本側の西洋依存という力関係、特に西洋から承認され同等に扱われたいという願望を逆手に取った議論を展開してひとまず上田を宥めようとしたが、このことが却って、彼の日本の知識人への見くびりを裏付ける結果となっている。そこで次に、上田が、ゲーテの権威を借りたフローレンツの傲慢な態度を敢えて拒否して見せることで、さらなる揺さぶりをかけていく様子を見ていくことにしよう。

## 7. 上田による批判の核心

もちろん、上田の議論の全てが理路整然としていたわけではない。また西洋の学術的ディスクリールをもとに判断すれば、フローレンツが西洋の詩論や文献学、言語学などに幅広く精通していたことも疑いない。逆に、「たった一疋」の「たった」が「だつた」に掛かるとか、「一疋の蝶々」という表現は日本語話者には問題ないといった上田の議論<sup>49</sup>には、説得力に乏しいものも多い。西洋からの承認を希求する上田の意

識下にはそもそも、フローレンツの翻訳姿勢を批判したい一方で、日本詩の独訳による西洋への紹介という行為そのものは歓迎せざるを得ないというジレンマが存在していた。そのため彼は、時に民族主義的ないし本質主義的とも取れる議論や、説得力に乏しい反論をするかと思えば、フローレンツの翻訳自体には感謝と賞賛をするという、首尾一貫性に乏しい態度を示しており、これがフローレンツに手厳しく批判される結果となっている<sup>50</sup>。

とは言えこの論争をめぐっては、どちらの主張が正しいかといった勝敗を論じることは重要ではない。そもそも何をもって「正しい翻訳」とするかという双方の基準が異なっていて、しかもどちらにも相応の根拠がある以上、勝ち負けを判定することによって、どちらかの議論を規範化することは避けるべきであろう。しかしそれでも上田の批判が、フローレンツの議論の背後に潜む日本「蔑視」の態度や、独日の文化の違いを優劣の関係で捉えている点を炙り出すのに大きく貢献していることは確かである。上田の議論を丹念に読み解いていくと、再三にわたる彼の批判の核心が、ゲーテやシラーにしか自らの正当性の根拠を見出そうとしないフローレンツの西洋中心主義的態度に向けられていたことがわかってくる。上田はおそらくフローレンツの議論の中から、論者自身も無意識のうちに吐露してしまった西洋中心主義的態度をいち早く読み取り、フローレンツにそのことへの自覚を促そうと議論を進めていたものと理解できる。

上田ならずとも、フローレンツの最初の反論（B）における「ゲーテ」という固有名詞の頻出ぶり（13回）は目につくだろう。フローレンツがこれをいわば錦の御旗にして、上田の批判をねじ伏せようとしているのとは対照的に、上田は、果たして西洋の理論が日本文学を語る上での唯一絶対の基準たりうるのかという、ある種の文化相対主義的な問題提起を行っているとも言える。

確かに、「獨逸にはなき、日本には非常に発達せる、俳諧発句と申すもの」<sup>51</sup>という上田の議論だけを字義通りに読めば、自国文化中心主義的な発言との解釈も不可能ではない。しかし上田は、(少なくとも論争当時は)偏狭な国粹主義者とは違い、フローレンツの議論に耳を貸そうとしなかったわけではない。フローレンツが博士号取得まで在籍した、比較文法研究・青年文法学派の牙城とされるライプツィヒ大学に留学した経験もある彼は<sup>52</sup>、積極的に西洋の理論を取り入れて国文学・国語学の近代化を推進した人物である。よって彼が西洋の文学理論における「叙情詩、叙事詩、劇詩」という詩の三大ジャンルを知らなかったはずはないから、彼が西洋の文学理論の受け入れを拒否し、無謀で感情的な暴論に陥った結果上記の発言が飛び出したなどと解釈することは難しい。

では上田はなぜ、あえて「日本特有の俳諧発句」を主張してフローレンツに応酬したのだろうか。考えられる可能性は、西洋の理論と日本文学のいずれにも造詣の深かつ

た彼だからこそ、日本の詩歌（特に短歌）を当時の西洋の文学理論のみに依拠して論じることに無理があると痛感したから、という理由である。フローレンツが最初の反論でゲーテの翻訳論を持ち出し、これを普遍化して論じようとしたためになおさら、上田はセンセーショナルに議論を展開して、フローレンツにこの点への注意を促そうとしたように見える。

だが上田への再反論（D）から明らかのように、フローレンツはまたも上田の主張にむきになって応酬していった。ここでの議論は、論争の趣旨とは関係のない、上田からの反論（C）や反訳への揚げ足取りに近いものも多く含まれている。叙情詩を更に「主想叙情詩」と「主情叙情詩」とに分類し、「落花枝に」の句は後者に属すると述べるかと思えば、「純粹の叙情詩」と「教訓様の警句を含める叙情詩」という分類まで持ち出して、ここでは前者に属する、などと殊更に定義を厳密化しているのがその好例である。「落花枝に」の発句を「真正の叙情詩」とした前言をここまで正当化しようというのは、もはや駄目押しの域を超えており、あたかもこれに続く罵倒にも近い科白「（上田がこの句を叙情詩ではなく俳諧発句だと言うのは：引用者）あたかもレッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』は劇詩にあらずして喜劇なりと言わんが如し」<sup>53</sup>を吐くためにわざわざ持ち出した理論のようにも見える。彼が訳した二首は西洋の基準に従えば叙情詩に含まれる、と論じれば足りるところ、果たしてこのように上田をこき下ろしながら理論を説く必要があったのか、との違和感を禁じ得ないような記述である。

しかもフローレンツは最初の反論で「日本の短歌狂句に類する叙情詩は欧州にはない」と述べていたにもかかわらず、再反論の場では一転、上田の主張する日本独自のジャンルの存在を認めなければならないばかりに、「ゾイメ、ハイネ、リュッケルト、さらに新ドイツ派の詩に守武、芭蕉、其角、去来等の俳句と、不思議にも似寄りたるものあり」<sup>54</sup>と述べて、立場の一貫性を自分から崩してしまっているのである。さらに彼は、それならば俳句も短い形のまま翻訳できるのではないかとの反論を恐れてか、今度は「クラブホルンフェルゼ」を引き合いに出して、この「卑俗とされる」ジャンルを狂句・川柳と類比させて、日本詩歌の価値を再度切り下げてしまう。さらにクーノー・フィッシャー（Kuno Fischer, 1824-1907）の『機知に就いて』*Über den Witz*<sup>55</sup>をもとに、「もる屋根を」の句を「非理を弄する頓智的比喩」<sup>56</sup>と定義するなど、発句、川柳を何としても西洋の理論の枠内に収めて配置・分類しようとしている。こうして彼は、自らは日本詩歌を肯定的に評価していたつもりだったにもかかわらず、実は自らの日本賞賛言説が所詮は西洋中心主義的な眼差しのもと、日本を見下す形で生産されたものであったことを自白してしまう結果となった。もともと肯定的評価から出発したはずの日本詩歌への言及が、論争時には彼の「匙加減」によって容易に覆り、過小評価に変わっていることも、この点を裏付けていると言えよう。

このようにフローレンツは、上田が「如何に先生がりきみたまひて […] 主張せらるるとも」<sup>57</sup>と表現したように、過剰とも言えるほど上田に反応した。上田がこの「りきみ」に乗じて難題を吹っ掛けると、フローレンツは再反論（D）の場で上田の批判に逐一反応し、更なる理論武装で応酬していった。再三にわたりゲーテを援用し、またあらゆる理論を動員して上田の反論を封じ込めて自らの主張の正当性を強調したフローレンツは、上田を説き伏せて勝ち誇ったように振舞っているが、ここには彼の教条的なまでの西洋中心主義思想が鮮やかに映し出されている。フローレンツは一おそらく上田に乗せられる形で—上田に応酬しようとするあまり、本音を吐いてしまったと言える。彼の思想の根底に潜んでいた、西洋文学を規範とし、ゲーテやシラーの著作を聖典と見做し、西洋の文学理論の普遍妥当性を信奉する態度が、上田との論争によって露呈し、同時に彼は自らが研究対象としている日本文学への過小評価ぶり、日本「蔑視」の態度を晒してしまったのである。

## 8. 翻訳という名の暴力

フローレンツ自身は日本詩歌を賞賛していたつもりだろうが、実は西洋中心主義的態度を宿していたゆえに、自らの立場を意識化すればするほど日本賞讃が難しくなっていくジレンマに彼は陥っていった。「日本詩歌は二・三行では翻訳不可能」とする論拠をゲーテに求めた結果、日本詩歌への過小評価ぶりを露呈した彼は、発句を表向きは西洋の「叙情詩」の地位と同等に扱って上田の「西洋との同化欲求」を満たすことで解決を図るが、これは上田によって拒否されてしまう。俳諧発句を独自のジャンルと定義した上田に対し、日本詩歌を何としても西洋のカテゴリーに収めようとする、今度は図らずも新ドイツ派の詩との類似性を認めてしまうことになり、すると彼は、クラップホルンフェルゼを持ち出して、発句の地位を再度切り下げにかかる、という具合で、フローレンツは反論するたびに苦し紛れの議論に陥っていくのである。

以上、論争における両者の立場を解釈し直すなかで、フローレンツに屈したように見える上田の方が、実は論争の主導権を握っており、フローレンツが上田の挑発に乗せられる形で、図らずも自文化中心的な態度を露呈していった、という構図が見えてきた。事実、双方の応酬を読み解くなかで際立ってきたのは、個々に争われた瑣末なことがら—訳語をめぐる問題や、韻律論、西洋文学の知識や美的基準など—に関するフローレンツの博学ぶりでも、ましてや上田の排外主義的態度でもない。むしろ、フローレンツが上田への反論を通してますます西洋中心主義に固執し、彼の意識下に潜んでいた、(1914年に最も顕在化することとなる)日本を見下した視線を徐々に表面化させて日本文学を過小評価していくプロセスである。そこで次に、フローレンツの

この態度をもとに、彼の翻訳行為そのものについても批判的に捉え直してみたい。

ポストコロニアリズム研究が批判してきたように、翻訳は常に言語間の力関係を内包しており、特に西洋近代語による翻訳は、往々にして非西洋の言語に対し暴力的な影響を及ぼす。アメリカの人類学者タラル・アサドは、翻訳とは言語間の不平等のもとでなされ、よってそれは権力関係と不可分に関わっている点をいち早く喝破して、従来のイギリスの社会人類学における、権力関係を捨象して「文化間の翻訳」を議論する姿勢を批判している<sup>58</sup>。「文化の翻訳」の前提に言語の翻訳の問題性を意識するアサドの議論は、「文化の翻訳」が氾濫する今日においてこそ、改めて読み直されるべきものだろう。

アサドによれば、西洋語から非西洋語への翻訳プロセスにおいては、後者が暴力的な変容を迫られる一方、非西洋語から西洋語への翻訳において西洋語が影響を受けるのは稀であるという。非西洋語に変容を迫るこの暴力は、明治期における言文一致などを通じた日本語の近代化プロセスからも容易に読み取れるだろう。またフローレンツが、日本詩歌の独訳プロセスにおいて、ドイツ語が変容する可能性を全く想定していなかったことも、アサドの議論と一致する。と同時に、フローレンツが自身の翻訳に際し、言語間の植民地主義的力関係を無意識の前提としていたこともわかる。さらにフローレンツの独訳プロセスにおいては、日本語の原作の形式やコンテクストまでもが西洋の価値基準に従属させられ、暴力的に変容させられている様子が確認できる。つまりコロニアルな力関係のもとでは、西洋語から非西洋語への翻訳において非西洋語自身が大きな暴力的変更を受けて西洋語との構造的同化を強いられるばかりか、非西洋語から西洋語への翻訳においては、言語の背景にある非西洋的文化的要素はヘゲモニアルな西洋文化の基準に従属させられる、というアシメトリー構造が存在しているのである。

事実『詩人の挨拶』では、原作に付随する文化的背景や間テクスト性は抹殺され、短歌も発句も狂句も十派一絡げに日本の詩として翻訳されていると言える。その結果、翻訳された詩は、西洋人が思い描くエキゾチックな日本という幻想の世界を演出するための小道具になっているのである。仮にフローレンツの主張を敢えて好意的に捉えて、日本の高尚な詩歌が低俗な欧州の風刺・警句と同列に扱われるのは忍びない、との親切心から彼が様式を改変したのだと解釈する（その姿勢もまた西洋の優越意識に基づくのだが）としても、彼の翻訳詩集に、原作を取り巻く「遠景」の大部分が（訳詩に付け加えられた部分を除いて）丸ごとそぎ落とされていることに変わりはない。また上田の指摘通り、この訳詩集には、原作の形式の痕跡はもちろん、大半の原作者の名前はおろか成立時期なども記されていない作品が多い。作者や年代、出典の明示されていない作品については、もともと「詠み人知らず」あるいは成立年代不詳なのか、それとも単に訳者フローレンツが原作者を特定できていないだけなのかも定かで

ない。さらに本の構成に目を向けると、万葉集の短歌と江戸時代の俳句とが同様に叙情詩調に訳されて、何の理由付けもなく同一頁に配置されるなど、フローレンツ独自の章立て（「自然のをかしみ」など）に応じて異なる年代の異なるジャンルの作品が混在していることがわかる<sup>59</sup>。これでは、ドイツ人読者に日本学者兼翻訳者フローレンツの存在をアピールすることはできても、日本文学のジャンルの多様さや時代の広がりについての認識を促すことは難しいだろう。フローレンツが卓越した日本語読解能力と日本文学に関する知識を併せ持っていただけになおのこと、彼にはこうした日本文学の独自性を読者により詳しく伝えられるような翻訳ができたのではないだろうか。だが言い換えれば、まさにフローレンツが当時の西洋人には稀有な優れた日本学者であったことが、彼に特権的な地位を与え、日本文学に関する恣意的な表象や言説の支配を可能ならしめたのだと言うこともできる。

もちろんフローレンツ自身は、ドイツ人読者に対しても、また上田ら日本の知識人に対しても、彼が最適と思われる手法で翻訳に取り組んだつもりだったに違いない。またどの作品を採用しどう翻訳し、配置するか、といった個々の原作に対する「生殺与奪の権」が訳者フローレンツの掌中にあったことそれ自体は問題ではない。しかし彼が日本文学の独訳に際して、ドイツ語優位の力関係を無意識のうちに前提としていたことで、彼は自身も気付かないうちに、言語の翻訳のアシメトリー構造のうちに日本の詩歌を取り込み、これを西洋中心的な美的基準と価値判断へと回収してしまったのではないだろうか。

上田萬年は、西洋言語の特権的地位や西洋語への翻訳に付随する価値基準の同一化、フローレンツの支配的な態度などを『詩人の挨拶』から敏感に感じ取ったに違いない。上田はまさにこの、フローレンツによる翻訳ないし *übertragen* という名の暴力に抵抗したのではないだろうか。この点は、これまでの上田萬年研究で明らかになった彼のナショナリスティックな心情の裏返しとも解釈できる。西洋近代のナショナリズムに範と取る彼にとっては、西洋近代知の枠組みと規範の受け入れ（及びそれに伴う自国の文化の変革）が必要不可欠である一方、西洋中心主義的価値観のもとでの東洋蔑視の視点を受け入れることはできなかった。このジレンマゆえに、上田はフローレンツの賞賛に潜む蔑視の態度を敏感に読み取り、日本文学が西洋人の興味やニーズに応える形で一日本人に発言の場が与えられないまま一西洋の言説に取り込まれることに反発してみせた。原詩の形式が17字ないし31字から成り立っていることすら伝えられずに、西洋で高尚とされる叙情詩の形式に置き換えられて日本の詩が紹介されたことに対し、上田は西洋の文化的価値を敢えて相対化することで抵抗を試みた。それにより上田は、結果としてフローレンツの西洋中心主義的態度や、そのもとでの翻訳行為が孕む暴力性を暴くことに成功したものと解釈できる。但し、だからと言って論争時の上田の主張に文化相対主義を読み込んで彼のナショナリズムを安易に相対化する

ことはできないだろう。むしろ彼の論争時の態度を、後年の極端なナショナリズムとの関わりにおいても捉え直す作業が今後必要になるものと思われる。

## 9. おわりに

上田—フローレンツ論争をめぐる以上の考察から、フローレンツの議論における西洋中心主義的態度と、彼の翻訳が内包する暴力性の一端が浮き彫りになった。本論では、論争時の双方の議論のディスクール分析が主眼であったが、今後は上田が問題視した二首をはじめ、さらに他の翻訳作品にも目を向け、訳文と原作とを対照することによっても、フローレンツの翻訳行為のさらなる問題点に迫れるであろうし<sup>61</sup>、またこの作業はフローレンツの日本研究活動そのものの批判的検証にも役立てられるはずである。さらに彼の「近代的」とされる文献学的研究手法そのものをポストコロニアルな視座から批判的に捉え直すことで、日本学という知の制度が抱える問題に様々な角度からアプローチできるはずである。

本論文では、初期日本学の主要課題であった「言語の翻訳」を出発点に、日本学者の翻訳行為と権力との関係を考察してきた。同様の問題意識のもとで、西洋における日本学の歴史、さらには他の非西洋地域に関する学問の歴史全般を、とりわけ翻訳の歴史として再考するとき、「知的支配の手段としての翻訳」「恣意的な異文化表象手段としての翻訳」など、従来の翻訳研究では論じ尽くせなかった、西洋植民地主義のもとでの「文化（的実践として）の翻訳」というテーマが一層深みと広がりを持って浮かび上がるに違いない。

## 註

<sup>1</sup> 本論文は、2008年8月27日に金沢星稷大学にて開催された第8回アジアゲルマニスト会議（Asiatische Germanistentagung）における口頭発表 *Japans „Rezeption“ der Germanistik und Deutschlands „Aneignung“ der Japanforschung: Lehr- und Forschungstätigkeit von Karl Florenz im Zeitalter des Kolonialismus* をもとに、更なる考察を加えたものである。

<sup>2</sup> ハンブルク植民地研究所は1918年に解体されたが、これを母体に1919年にハンブルク大学が設立されると、フローレンツは同大学日本学科の教授に就任した。ドイツの大学で初めて独立した日本学科が誕生したのもハンブルク大学においてである。

<sup>3</sup> Dittmer, Hans A.: „Florenz und japanische Geschichte“, in: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens / Hamburg (Hrsg.): *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens / Hamburg*, Bd. 137, 1985, S. 7-17, hier: S. 17.

<sup>4</sup> Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin / Japanisch-Deutsche Gesellschaft (Hrsg.): *Brückenbauer. Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches*, ベルリン日独センター・日独協会（編）：

『日独交流の架け橋を築いた人々』, Iudicium, München, 2005, S. 350-357 のフローレンツ関連項目などを参照。

<sup>5</sup> Florenz, Karl: *Deutschland und Japan* (Deutsche Vorträge Hamburgischer Professoren, Nr. 6), Friederichsen, Hamburg, 1914, S. 18. 日本語訳は筆者による。

<sup>6</sup> 例えば Florenz, Karl: *Die Geschichte der japanischen Litteratur*, 2. Ausgabe, C. F. Amelang, Leipzig, 1909, S. VII. を参照のこと。

<sup>7</sup> チェンバレンによる日本古代歌謡の英訳や (Chamberlain, Basil Hall: *The classical Poetry of the Japanese*, Osgood, Boston, 1880) アストンによる英訳『日本書紀』 (Aston, William George: *Chronicles of Japan / Nihongi*, Japan Society, London, 1896)、フローレンツによる独訳『日本書紀』 (Florenz, Karl: *Japanische Annalen: A. D. 592-697, Nihongi, Von Suiko-Tenno bis Jito-Tenno* <Buch 22-30>, Hobunsha, Tokyo, 1903.) などのように、研究業績自体が翻訳を主体に成り立っているものも多いうえ、アストンやフローレンツによる日本文学史の概説書 (Aston, William George: *A history of Japanese literature*, Heinemann, London, 1899. Florenz, Karl: *Die Geschichte der japanischen Litteratur*, Amelang, Leipzig, 1906) においても、紙面の多くは著名な文学作品の翻訳によって占められている。

<sup>8</sup> フローレンツの最初の出版業績は彼の博士論文で、これも翻訳 (ヴェーダのドイツ語訳) 業績である。なおこの論文はライプツィヒ大学により優れた研究業績として認められ、賞を贈られている。Florenz, Karl: *Das sechste Buch der Atharva-samhitā*. Übers. u. erklärt. Eine von d. Universität Leipzig 1885 gekrönte Preisschrift, Druck d. Univ.-Buchdr. v. E. A. Huth, Göttingen, 1887.

<sup>9</sup> Florenz, Karl: *Dichtergrüße aus dem Osten: Japanische Dichtungen*, übertragen von Prof. Dr. Karl Florenz, C. F. Amelang, Leipzig, 1894. 佐藤マサ子はこれを『東方よりの表敬』 (佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』, 春秋社, 1995年, 70ページ) と訳しているが、本論文では『東方からの詩人の挨拶』と表記する。もっとも、フローレンツの意識下に東洋詩を劣等視する態度を読み込むならば、彼が自らの独訳詩集をいわば西洋に「献上」する形で上梓したと見ることも可能であろう。よってフローレンツの植民地主義的態度を反映しているという意味において、佐藤の用いた「表敬」という訳語は適切であるとも言えるのだが、ここではひとまず GrüÙe をより中立的に解釈して「挨拶」とした。

<sup>10</sup> 収録されている翻訳詩は全部で57作品あり、その内訳は、万葉集から30首、古今集から9首、現代詩が3作品、それに催馬楽と神楽歌が各1作品、素性 (法師)・(藤原)実定・和泉式部・(荒木田)守武・(向井)去来・(立花)北枝から各1首、それに作者・出典とも明記されていないものが7作品である。佐藤は「万葉集翻訳も一部加えられている」 (佐藤, 前掲, 70ページ) と述べたが、実際には万葉集が過半数を占めていることがわかる。また佐藤は「『東方よりの表敬』の俳句の翻訳が上田 [...] に取り上げられて」 (前掲, 70ページ) としているが、上田が書評で取り上げたのは発句と川柳である。

<sup>11</sup> 論争は全て帝國文學会 (編): 『帝國文學』 (1895年1月創刊) 誌上で繰り広げられた。なお原本の入手が困難であったことから、本論文では日本図書センター発行の覆刻版 (1980年) を使用したまたページ脇とページ肩に二種類のページ番号が付されているが、本論文ではページ脇のものを基本とし、ページ肩のものは括弧内に記載している。

<sup>12</sup> Bhabha, Homi K.: "The other question: Difference, discrimination, and the discourse of Colonialism", in: Baker, Houston A. / Diawara, Manthia / Lindeborg, Ruth H. (Ed.): *Black British cultural studies: A Reader*, Univ. of Chicago Press, Chicago, 1996, pp. 87-106. ホミ・K・バーバ (富山太佳夫訳): 「他者の問題—差異、差別、コロニアリズムの言説」、富山太佳夫 (編): 『文学の境界線』, 現代批評のプラクティス: 4, 1996年, 167-207ページ, 参照箇所は182ページ。

<sup>13</sup> Bhabha, Homi K.: *The Location of Culture*, Routledge London / New York, 1994. ホミ・バーバ (本橋哲也ほか訳): 『文化の場所: ポストコロニアリズムの位相』, 法政大学出版局, 2005年,

423-424 ページ。

<sup>14</sup> こうした視座を援用すれば、例えば植民地主義を末端で支えるとともに後の独立闘争の担い手ともなった現地エリート層の存在など、従来の議論で見過ごされてきた様々なアクターの存在とその多義的な役割を解明することが可能だろう。

<sup>15</sup> 例えば、同上、427-436 ページの訳者あとがきより（引用は 427 ページ）。また齊藤一：『帝国日本の英文学』、人文書院、2006 年、85 ページも参照。その他、Bachmann-Medick, Doris: *Cultural Turns. Neuorientierungen in den Kulturwissenschaften*, Rowohlt-Taschenbuch-Verl., Reinbek bei Hamburg, 2006, S. 189 にも „Dreigestirn“ や „Heilige Dreieinigkeit“ という表現で同様の形容が見られる。

<sup>16</sup> バーバの議論の問題点については、例えば以下の文献を参照のこと。Castro Varela, Maria do Mar / Dhawan, Nikita: *Postkoloniale Theorie: eine kritische Einführung*, Transcript, Bielefeld, 2005, hier: S. 100-109.

<sup>17</sup> 例えばバーバが、ポストコロニアル文学を「植民地宗主国の抱く近代の共同幻想を「翻訳」し書き換えていく」ものと捉え（バーバ：前掲、11 ページ）、文化の境界線で働くものの新しさを「文化的翻訳という反乱行為としての新しさ」と表現するとき（同 13 ページ）、既に「翻訳」という語の本来的な意味は失われてしまっていると言えるだろう。

<sup>18</sup> 『帝國文學』、第一巻第二号、98-99 (36-37) ページ雑報欄の「批評 Dichtergrüße aus dem Osten: Japanische Dichtungen ドクトル・フローレンツ訳」より。

<sup>19</sup> この句は、荒木田守武（1473-1549）の作と言われており、フローレンツも『詩人の挨拶』の目次で守武の作と紹介している（Florenz: *Dichtergrüße...*, S. 5.）。但し、『近世俳句俳文集』によれば、『音韻集』（1674 年）に荒木田武在の作として「落花えだにかへるとみしはこてふかな」の発句が見られ、武在も守武も同姓であったために、後に混同されて守武の作と伝えられるようになったという（栗山理一 [ほか] 校注・訳：『近世俳句俳文集』、日本古典文学全集 42、小学館、1972 年、56 ページ）。なおローラント・シュナイダーの論文における Chōchō-kana (Schneider, Roland: „Karl Florenz als Übersetzer - Der Übersetzungsdisput zwischen Karl Florenz und Ueda Kazutoshi“, in: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens / Hamburg (Hrsg.): a.a.O., S. 69-73, hier: S. 70) は Kochō-kana の誤りと思われる。

<sup>20</sup> 「もる屋根を」の川柳の作者は不詳である。なおフローレンツが典拠とした、岸上操撰（編）：『古今狂歌狂句集』（東洋文藝全書：第 15 編）、博文館、1891 年では「もる屋根を」ではなく「もる家根を三歳直さぬ馬鹿孝子」（同 340 ページ）となっているが、ここでも作者は付されていない。また上田は、書評において「下に書きつけたる宗武とかいふ作者」（『帝國文學』、第一巻第二号、99 (37) ページ）と記述しているが、『詩人の挨拶』においては、「もる屋根を」の作者が示されない一方、「落花枝に」の発句については目次で荒木田守武の作と紹介されている。そのため上田の記述は「守武」の誤りである可能性が高い。

<sup>21</sup> 『帝國文學』、第一巻第三号、1-17 (69-85) ページ。なおタイトルは目次では「日本詩歌の精神と歐州詩歌のとの比較考」となっている。

<sup>22</sup> 「獨逸人をして、日本人がその原作に於けると一様なる情緒と快味とを感ぜしめ得べき乎」（同上、3 (71) ページ）。

<sup>23</sup> フローレンツ自身は、ゲーテの論の出典を明記していない。フローレンツが引用したゲーテの論が『西東詩集』に見られるとは、ローラント・シュナイダーの指摘による。フローレンツが紹介した 3 つの翻訳法は、シュナイダーも指摘したように、ゲーテの『西東詩集』における翻訳論を概要要約したものと言えるだろう（Schneider: a.a.O., S. 72.）。

<sup>24</sup> 「七箇の封印ある書」とはドイツ語で „ein Buch mit sieben Siegeln“ のことで、「不可解なこと、謎の多いこと」を形容する熟語。

<sup>25</sup> 同上、第一巻第五号、51-59 (65-73) ページ。なお目次では「フローレンツ先生の比較考を読む 文學士 上田萬年」と記載されている。

<sup>26</sup> 同上、第一巻第七号、69-76 (115-122) ページ。

<sup>27</sup> シュナイダーは前掲書において、Klapproth-Verse (Schneider: a.a.O., S. 71) と記しているが、これは Klapphornverse の誤りと思われる。なお Klapphornverse とは、19 世紀末に流行した諧謔詩の一ジャンルである。1878 年、ミュンヘンで発行された *Fliegende Blätter* 誌に、ゲッティンゲン大学の公証人であったダニエル (F. Daniel, 1809-1899) のものとされる以下の章句が掲載されると、これを模倣した同様の諧謔詩が作られるようになったという。„Zwei Knaben gingen durch das Korn, der andere blies das Klapphorn, er konnt' es zwar nicht ordentlich blasen, doch blieb er's wenigstens einigermaßen.“ (Habicht, Werner (Hrsg.): *Der Literatur-Brockhaus: 2 (Fu - Of)*, Brockhaus, Mannheim, 1988, S. 370f.)

<sup>28</sup> 「注釈などは不相應なりとて、出版者の注意もありたれば、学問上の附属物を遠け、此書の中身は、悉く讀者の直観的趣味に呈することとせり」(『帝國文學』、第一巻第七号、73 (119) ページ)。

<sup>29</sup> 同上、第一巻第九号、72-76 (158-162) ページ。

<sup>30</sup> 同上、73 (159) ページ。

<sup>31</sup> 千葉宣一『モダニズムの比較文学的研究』、おうふう、1998 年、265 ページ。なお千葉は既に『現代文学の比較文学的研究：モダニズムの史的動態』(八木書店、1978 年)においてこの論争を取り上げている。

<sup>32</sup> 佐藤：前掲、93 ページ。

<sup>33</sup> 同上、72 ページ。

<sup>34</sup> 同上、93 ページ。

<sup>35</sup> 同上、70 ページ。

<sup>36</sup> 同上、72 ページ。

<sup>37</sup> Schneider: a.a.O., S. 73.

<sup>38</sup> 佐藤：前掲、70 ページ。

<sup>39</sup> 千葉：前掲、272 ページ

<sup>40</sup> 上田萬年：「國語のため」(抄)、久松潜一(編)：『落合直文・上田萬年・芳賀矢一・藤岡作太郎集』、明治文学全集 44、筑摩書房、1968 年、108-190 ページ。なお引用箇所は 110 ページで、これは 1894 年 10 月 8 日に上田が行った講演「國語と國家と」(同 108-113 ページ)における発言である。

<sup>41</sup> 小森陽一『日本語の近代—日本の 50 年 日本の 200 年』、岩波書店、2000 年、イ・ヨンスク：『「国語」という思想』、岩波書店、1996 年、安田敏朗：『統合原理としての国語』、近代日本語史再考 (3)、三元社、2006 年などを参照。

<sup>42</sup> 千葉：前掲、265-271 ページ。

<sup>43</sup> 金子美都子と柴田依子によれば、クーシューのこの翻訳の初出は、1904 年 4 月から 8 月にかけて文芸誌 *Les Lettres* に 4 回にわたって連載されたエッセイ“Les Haïkai: Épigrammes poétiques du Japon”「ハイカイ (日本の詩的エピグラム)」の第二章においてであるという。初出が確認できるまたこのエッセイはその後 1916 年に出版された著書 *Sages et poètes d'Asie* 『アジアの賢人と詩人』にも収録されている (Couchoud, Paul-Louis: *Sages et poètes d'Asie*, Calmann-Lévy, Paris, 1916. ポールルイ・クーシュー (金子美都子・柴田依子訳)：『明治日本の詩と戦争』、みすず書房、1999 年、147 ページ)。

<sup>44</sup> Pound, Ezra: "Vorticism", in: *Fortnightly Review*, Spet. 1914, pp. 461-471, p. 467. パウンドの英訳が左記の文献に掲載されていることは、金子・柴田の指摘による（クーシュー（金子・柴田訳）：同上、150-152 ページ）。

<sup>45</sup> Bachmann-Medick, Doris: „Multikultur oder kulturelle Differenzen? Neue Konzepte von Weltliteratur und Übersetzung in postkolonialer Perspektive“, in: dies. (Hrsg.): *Kultur als Text: die anthropologische Wende in der Literaturwissenschaft*, 2. aktualisierte Auflage, Francke, Tübingen, 2004, S. 262-296, hier: S. 264.

<sup>46</sup> しかもこの西洋的価値の普遍化は、植民地支配の終焉後には、旧植民地の支配層にも受容されて暴力的な他者表象を再生産し続け、数々の問題を引き起こしている（インドにおける女性差別やアフリカ諸国における民族紛争には、独立後の旧植民地世界が西洋モデル「達成目標」として志向した結果起きているものも多い）。そのため今日のポストコロニアル研究は、植民地化を正当化してきた西欧世界の他者表象の問題性に加えて、独立後の旧植民地世界が西欧の概念を内面化したことで生じる他者表象の問題にも取り組むことが重要になってきている。

<sup>47</sup> 『帝國文學』所収のフローレンツの他の講演原稿や論考は、通常フローレンツがドイツ語で執筆し、片山正雄が日本語訳している。だがこの論争における各論考には訳者名が付されていないことから、フローレンツは、自ら日本語で反論を執筆していたものと考えられる。

<sup>48</sup> 『帝國文學』、第一巻第三号、16（84）ページ。

<sup>49</sup> 同上、第一巻第五号、58（72）ページ。

<sup>50</sup> 「タツタはダツタの副詞なるよし、學士は少しく文法を解する者に此説を吹き込み得べしと信じ給ふか、聞かまほし」（同上、第一巻第七号、75（121）ページ）、「丸切り相反対せる口振りの孰れが學士の真意なりや」（同上、76（122）ページ）。

<sup>51</sup> 同上、第一巻第五号、52（66）ページ。

<sup>52</sup> 上田の略歴については、上田万年：『国語学史』（上田万年講述、新村出筆録、古田東朔校訂）、教育出版、1984年、238-270ページの「上田万年先生年譜」に詳しい。

<sup>53</sup> 『帝國文學』、第一巻第七号、70（116）ページ。

<sup>54</sup> 同上、71（117）ページ。

<sup>55</sup> Fischer, Kuno: *Über den Witz*, Kleine Schriften 2, 2. durchg. Aufl., Fischer, Heidelberg, 1889.

<sup>56</sup> 同上、72（118）ページ。

<sup>57</sup> 同上、第一巻第五号、54（68）ページ。

<sup>58</sup> Asad, Talal: "The Concept of Cultural Translation in British Social Anthropology". In: Clifford, James / George E. Marcus (Ed.): *Writing Culture*. University of California Press, Berkeley(CA), 1986. (Asad, Talal: „Übersetzen ZWISCHEN Kulturen. Ein Konzept der britischen Sozialanthropologie“. in: Berg, Eberhard / Fuchs, Martin (Hrsg.): *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation, Suhrkamp*, Frankfurt/M, 1993, S. 300-334.

<sup>59</sup> 『詩人の挨拶』は6章から成っており、各章の題目と収録作品数は以下の通りである。I. Herzblätter (22), II. Naturgenuss (12), III. Ernst des Lebens (6), IV. Höfliche Dichtung (3), V. Bute Blätter (11), VI. Anläufe zur Epik (3). (Vgl. Florenz: *Dichtergrüße...*, S. 5-7.)

<sup>60</sup> フローレンツは、『日本文学史』において「落花枝に」の発句を、対訳形式で三行に収めて訳しており、「二・三行では訳せない」との論争時の立場との事実上修正している（Florenz: *Die Geschichte der japanischen Litteratur*, S. 443.）。しかし彼は、「もる屋根を」の川柳に関しては、同様に三行の対訳を示す一方で、「これでは詩の面白味が理解できない」として、『詩人の挨拶』に掲載した6行からなる翻訳（Der Misverstandene Konfucius.）を紹介して、なおも自説にこ

だわっている (Ebd., S. 449f.)。しかも「落花枝に」の叙情詩調の訳詩 (Augentäuschung) は『日本文学史』では紹介されておらず、ここでも彼の立場のずれが露見している。今後さらに彼の翻訳を比較検討していくことで、彼の翻訳姿勢の変化や連続性について明らかになるものと思われる。但し『詩人の挨拶』を扱う際には、原作と訳詩とが乖離しているうえ、訳者が原作を併記していないため、原作の特定は困難である。